英知通信

発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2—18—1　（〒661）
TEL (06) 491 — 5083
編集
英知大学広報室

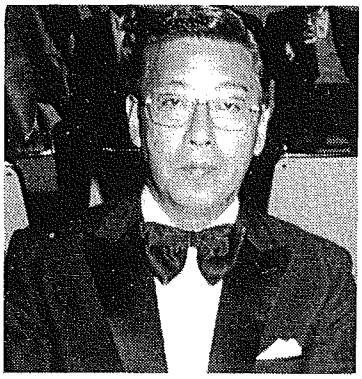
1982. 11. 30　UNIVERSITAS SAPIENTIAE　No.35

英知大学後援会会長に
吉田　宏氏就任

昭和四十九年七月二十七日英知大学後援会創立発起人会が開催されてから今日まで、八年有余の歳月が流れた。その間、初代会長山口満雄氏が三年、福田健彦氏が二年、野口儆氏が一年、東功氏が二年間、後援会長をつとめられた。歴代の会長はそれぞれ多忙な仕事を持ちながら、歴史の浅い本学後援会並びに大学の充実と発展のために尽力された。

このたび退任された前会長の東功氏は昭和五十五年度・五十六年度の二年間、会社経営という極めて多忙な中を、大学の教育援助と後援会の運営に並々ならぬ関心を寄せ、外出先からでも大学に電話連絡する等、献身的に尽力されてこられた。

このたび後援会役員改選により、吉田宏氏が新しく会長として選出された。また今後は原則として、副会長を一か年経験した者が次の会長に就任するという新しいルールも決められた。新会長を迎えて後援会のより円滑な運営と一層の発展が期待される。



新後援会会長
吉田　宏氏

昭和十年三月三十日生
甲南大学経済学部経済学科卒業
日本伸銅株式会社取締役社長
堺商工会議所副会頭
堺市参与

後援会会長
新任のあいさつ
吉田　宏

このたび図らずも歴代の名会長のあとを受けまして、英知大学にお世話になってまだ日も浅い不肖私が、後援会長をお引受けすることになりました。私は後援会の経験も乏しく、甚だ不向きではありますが、幸いベテランの副会長様はじめ役員各位のご協力とご指導により、一ヵ年間大学のため努力いたしたいと存じます。どうかよろしくお願いいたします。

さて、国際化社会に適応した人材の教育は、単に英語が話せたり、ナイフやフォークを使うのが目的ではなく、まず何よりも日本の伝統文化を理解して、日本人としての誇りをもって外国人と話し合える人間の教育が肝要であり、また諸外国の歴史を知ることも当然ながら必要であります。

本学においては、その意味で最も適切な教育が施されております。後援会としても出来る限りのバックアップをし、真に自主性をもった学生の教育の場としての発展に寄与する所存でございます。

どうか役員各位は申すまでもなく、会員の皆様におかれても、大学や後援会の行事にはできるだけ出席して、本大学を知り、親密なお気持をもって大学を後援して下さいますようお願い申し上げます。

◇

開学記念特別講演会並びに第八回後援会親睦パーティ開催

十一月三日の文化の日は絶好の秋日和に恵まれ、恒例の本学開学記念特別講演会並びに後援会主催第八回親睦パーティが催された。この親睦パーティは後援会が毎年先生方を招待して昼食をともにしながら打ちとけて懇談し、大学の教育方針を理解すると共に、相互の親睦を深めるために開催されているもので、本年で八回目である。年毎に盛大になり、当初の目的を達成しつつあるのは誠に喜ばしいことである。

午前十時半から六甲カウンセリング研究所長井上敏明氏の「競争社会に生かす新しい能力観—これからの時代が求めている人間像をさぐる」と題する講演があり、今日の家庭や学校教育において誤った能力観のために人格形成がいかにゆがめられているかを分りやすく解明して、約二百名の聴衆者に深い感銘を与えた（別掲「講演要旨」参照）。

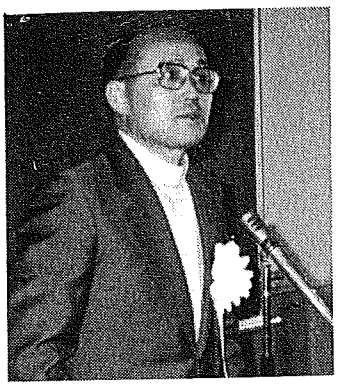
続いて正午過ぎから学生食堂で親睦パーティが行われた。まず中島副会長が開会のことばを述べ、吉田会長の挨拶に続いて、傘木学長が歓迎と後援会への感謝の挨拶を述べた。次いで吉田会長の発声で乾杯し、会食・懇談に入った。最後に阪本副会長が閉会のことばを述べた。本年のパーティの参加者は父兄一五一名、先生三一名で、昨年より更にふえ、中には沖縄の那覇市をはじめ、北九州・福井・愛知・岐阜・岡山・鳥取・徳島等の遠方から参加された方もあり、夫婦同伴の出席も三六組にのぼった。各学科学年別に一五グループに分かれ、グループ毎にその学科学年の二名の先生方を囲んで着席し、和やかな雰囲気のうちに子女の教育や当日の特別講演の内容等について熱心な話し合いが続き、時のたつのも忘れる程であった。閉会後、講師井上先生の著書を記念に一冊宛渡され、「とてもよい会でした」、「楽しい会でした。また来ます」と喜んで帰られる姿を見て、関係者は疲れも忘れて成功を喜び合った。閉会後父兄の方々は学生の催し物や模擬店など大学祭の一と時を学生と共に楽しんでおられた。（文責・後援会書記）

第八回 英知大学後援会総会 開催

去る五月二十二日（土）午後二時から本学本館三〇一教室で第八回後援会総会が開催され、六十名の父兄が出席した。大多数は兵庫、大阪、京都、奈良、和歌山などの近府県から、また遠くははるゞ北九州、福井県、鳥取県からも来られた方もあった。会長並びに学長の挨拶のあと、会則第十二条により会長を議長として議事が進められた。

昭和五十六年度決算報告。
議長の指名により西田書記が別掲の決算書に基づいて収支の各項目を説明。助成金については、テニスコートの改修、教室棟屋上修復内装工事費などの教育環境改善費並びに教員の研究助成、学生奨学金、課外活動奨励金、および図書費等に当てられた旨説明した。

監査報告
橋本監査から帳簿書類の完備と会計処理が適正に行われている旨報告があり、決算報告および監査報告共満場一致で可決された。



昭和五十七年度予算案審議
議長の指名により西田書記が別掲の予算案について説明し、満場一致で可決された。

役員改選
議長は会則六条、七条、八条を説明したあと、役員選出の方法をはかった。会員の中から理事会案の発表の要請があり、議長は次の通り発表した。

会　長　吉田　宏（新任）
副会長　中島　忠次（新任）
副会長　阪本美佐子（再任）
監　査　田中　良一（新任）
監　査　芝谷　昭三（新任）

この案が満場一致で可決された。常任理事および理事は会則通り後日会長から委嘱し、発表する予定。

旧新会長のあいさつ
東会長が退任役員を代表して離任の挨拶、続いて前掲五名の新役員が前に並び、吉田新会長が就任の挨拶をした。

感謝状と記念品の贈呈
吉田新会長から東前会長、北原前副会長、橋本、谷本両前監査に感謝状と記念品目録が贈呈され、会員一同から盛大な感謝の拍手が送られた。

学長挨拶
議事の終了後学長から挨拶があり、阪本副会長の閉会のことばで第八回総会を終了した。

総会終了後、図書館一階集会室で恒例の懇親茶話会が催された。今年は十五人の教員の出席を得て、父兄は各学科別に分けられた九つのテーブルにそれぞれ一～二名の先生を囲んで着席し、飲食を共にしながら学生や大学について歓談した。和やかなうちにも真剣さのただよう話し合いは閉会後もしばらく続き、名残り惜しげであった。また数日後、この会に初めて参加した一回生の父兄がたから「家庭的なよい大学に入れてもらって子供はしあわせです」という電話があいついだ。

昭和56年度 英知大学後援会決算書

自昭和56年4月1日
至昭和57年3月31日

1．収入の部

項目	金額	備考
入会金	8,520,000	新1年3万円×284人
会費	22,880,000	新1年8万円×286人
雑収入	1,014,646	銀行利子、親睦パーティ会費等
繰越金	1,492,137	昭和55年度よりの繰越金
収入合計	33,906,783	

2．支出の部

項目	金額	備考
助成金	31,000,000	英知大学への助成金
事業費	1,162,230	総会、茶話会、親睦パーティ費
事務費	68,410	通信印刷費他
会議費	127,760	会議費
慶弔費	48,330	学長ご尊父の香料 会員死去の際の弔電料
予備費	170,000	役員への記念品料 入会金の払い戻し
繰越金	1,330,053	昭和57年度への繰越金
支出合計	33,906,783	

昭和57年度 英知大学後援会予算書

自昭和57年4月1日
至昭和58年3月31日

1．収入の部

項目	金額	備考
入会金	10,000,000	新1年4万円×250人
会費	20,000,000	新1年8万円×250人
雑収入	750,000	銀行利子、親睦パーティ会費等
繰越金	1,330,053	昭和56年度よりの繰越金
収入合計	32,080,053	

2．支出の部

項目	金額	備考
助成金	30,000,000	英知大学への助成金
事業費	1,500,000	総会、茶話会、親睦パーティ費他
事務費	100,000	通信印刷費等
会議費	200,000	会議費
慶弔費	100,000	会員死去の際の弔電料他
雑費	30,053	
予備費	150,000	
支出合計	32,080,053	

開学記念講演

「競争社会に生かす新しい能力観」（要旨）

六甲カウンセリング研究所長
井上敏明氏

最近の日本社会で若者をだめにしているものとしてまず挙げられるのは〝歪んだ能力観〟である。受験をネックにした日本の青少年の問題を臨床的な立場から見ると、大ざっぱにいってノイローゼにつながる「神経症群」と「非行群」とに分類される。神経症群は大へん幅が広く、幼稚園での対人関係が悪くて起きる登園拒否症、小・中・高校生による登校拒否症、大学生になって授業に出たがらない登学拒否症、そして大学卒業はまだ近だが社会へ出るのが嫌でなかなか就職したがらない就職拒否症がある。また最近増加している出勤拒否症、社会へ出て結婚もして子供もできたがどうも生活がうまくゆかないという妻子拒否症、妻が夫を見放してしまう父子拒否症などがあり、現代はまさに「拒否症時代」だといえる。家庭裁判所の調査では最近の離婚の特色は、勉強ができて一流高校から一流大学を経て一流企業というコースを辿った人に多くみられるという。能力的に優秀な人ほど人間関係が未熟でアンバランスなために結婚生活がうまくゆかないという結果が出ており、ここに現代的特徴がある。

最近新聞の「卒業生に送る言葉」という特集記事で、ある有名進学高校の校長先生が「家庭裁判所で気になる話を聞いた。増える離婚に有名校出身者が多いという。年ごろの君たちだ、結婚や家庭についてもしっかり考えてほしい」ということを言っていた。卒業式に送る言葉としては大へん珍しい内容だが、同高校では卒業式のあとで父兄を集めて、「東大へ入学した多数の卒業生は、長年月を受験勉強ひとすじで母親につきっきりで世話をされてきたために、異性の本当のやさしさが見分けられなくて簡単に女性に騙されている。父兄も充分に注意してほしい」という注意があったという。こういう進学校では高一に入学する時点では高二の実力がなければついて行けず、高二に進級する時は高校三年間のカリキュラムをすでに終了していて、あとの二年間は大学受験一本槍だ。遊びもし、趣味を豊かにしながらスイ〳〵と一流コースに乗れる優秀な者も沢山いて、この場合は問題はないが、一日二十四時間を受験一色で過さなければコースに乗れない子供の場合は、生活全般に母親がべったりくっつかざるを得ない。このようなる母子癒着を生み、また最近では自分が母子癒着であることを何とも感じなくなっている。母子癒着人間の特徴は、温和しく、真面目で素直で自己表現が下手で、非常によく勉強する。そして母子癒着の延長上に母子相姦があり、これも最近増加している。母子癒着の根を探ると、小学校三年頃から大学入試までの約十年間、家族ぐるみで受験学習一本槍の生活だ。トイレは天井から床までびっしり英単語が貼りつけてあり、入浴時も自分で身体を洗う時間が惜しいので、母親に洗ってもらいながら本人はカセット・テープで学習を続ける〟一日二十四時間が学習時間で、こうした学習態勢が母子癒着を生む。こうして有名中学・有名高校・一流大学へのコースは確保できたが人間関係は全くだめというケースが多い。自己中心的で対人関係はうまく乗りきれないが試験には強いという人が結果的に一流大学に沢山集っている。そしていざ就職に直面して、何があるか分らない社会に対して不安になる。

逆説的に云って人間は不安が強いからよく勉強するのだ。一流大学を出なければだめだと云われると、不安感の強い人間は自分の将来の計画に強い関心を持つようになり、必死で勉強する。反対に物事を衝動的に考える人間は、自分の将来についてもあまり考えない。こゝにノイローゼと非行との相違があり、これは子供の質によって変ってくる。大別すると有名校にはノイローゼが多い。原因は背景に強い不安感があるから不安を先取りしてしまう頭の個性があるからだ。そしてコースを設定されると頑張っていくが、予定のコースから少しでもずれると、現実に自分を引き戻す力がない。こゝに有名校の神経症群の問題がある。非行群は受験に弱い低学力校に多い。有名校の人間だから社会へ出てからも強い人間だとは限らないし、受験に弱い学校の出身だから社会人となってからも弱いということはない。このように人間は論理的な人と直感的に物事を考える体当り的な頭の人とに大別される。

また学校の教育評価によっても分けられる。学校では知能の中のある部分（記憶力や理解力）を重視するが、社会生活における能力は全く別のものだ。学校の成績は悪かったが社会的に成功した実業家の例は沢山ある。しかし現実では学校でよくできた人が頭が良いといわれている。こういう学校教育評価をご破算にしてみるくらいの気持で能力というものをもう一度見直さなければ、今後の日本は危い。テストだけに追われているテスト人間だけが一流コースに乗っていくということであれば、一見頭が良いように見える片寄った人間として育ってしまう。受験地獄のなかった戦前は、自然な状態で能力のある人間だけが一流大学へ入学できた。

しかし現代のように最初から作戦的にモーレツ塾に行って入浴時間も惜しんで勉強した結果、何とか入学にこぎつけるというやり方では、ある部分は冴えるがそれ以外は伸びない。そういう人がコースに乗った場合、いったいどんな人間が育つのか。一見頭が良いように見える片寄った人間は自我の成熟がなく、人形のようだ。自我は道徳感につながる自我（P的自我）、親的な自我（a的自我）、幼児的自我（C的自我）に分けて考えられる。人間は本能的なものに対して適度な抑圧をしたり方向の舵とりをしながら生きていくものだが、母子癒着のケースでは、たとえ強い子供に育ってはいてもこの抑圧や方向づけを全部母親がカバーしてやるので、有名校へ入学しても自己中心的な人間になる。能力がありプライドも高いが相手のことが理解できない人間になる。即ち対人関係の中で相手と自分との関わりを通して、自分がどのように対応してよいかわからないピントの合わない未熟な人間になる。人間は成長の段階でP、a、Cという自我を、さまざまな体験の中から身につけていくが、ある部分を全部親がとってしまうと子供は云われた方向だけを見つめていればよい。これが優秀な学生、そして優秀な社員となっても、ひとたび事件に巻き込まれると、先ごろのI・B・M事件の日本企業の社員のように、自己形成がなされていない未発達人間として醜態を演ずる。非行少年の場合は家庭の崩壊などが原因で自我が育たないから、別の我儘がある。勉強のできた人間もできなくて非行に走った人間も、自我のバランスが崩れてノイローゼになりやすい。この観点から、よくできすぎた子供は危いし、また特にできなかった子供もノイローゼになりやすく、中間ぐらいが適当だといえる。中間とは「対人関係を豊かに持ちやすい社会状況の中で生きていける人間」とみてよい。できる子はできるから期待される。期待されるから無理をする。無理がうまくいかなくなってコースから外れるとノイローゼになり、場合によっては家庭内暴力につながる。反対にできない子は、できないのでやゝ拒否される。拒否されると居直らざるを得ない。この居直りが非行につながり学校内暴力に発展する。兵庫県警の調査では、今年上半期までの一年間で家庭内暴力の相談数は二倍以上に増えた。温和しく真面目でいゝ子がある日突然変貌する。期待されて無理している子供の根本は

受験につながる勉強だ。できるから注意をされたことがない。その間いい子になりすぎているので少しコースから外れたことでひとたび注意を受けると、過去にその経験がなく、そのことに耐える力がないためにストレスの状況が子供をパニックにさせる。その結果家庭内暴力になる。

子供を家庭内暴力や校内暴力に走らせる根本にあるものは、生命のエネルギーである「承認欲求」のなせる業であろう。人間は相手に認めてほしいという気持を持って生きている。子供の心の中の状態は、学校教育の中で自分がどんな評価をされてきたかということで形成されていく。大別すると、落ちこぼれは認められていないという気持があるのでどこかひねくれていて攻撃的になる。反対によくできた人ほど保守的になる。承認欲求は誰にもあるのに、日本では十八才までの学校教育の長い過程の中で、優越意識と劣等意識のうちどちらを向いて通ってきたかということで、その人間の心理状態が変ってくるのだ。だから大学時代にこのモヤモヤした心理状態をうまく整理してから社会へ出るべきである。この整理ができていなければいつ迄もこの気持は引っかゝっていく。人間は優越意識と劣等意識のどちらに片寄ってもよくないし、片寄った人間は対人関係の中でも無理が生じていく。ある片寄った能力観の中でしか承認欲求が得られないとすれば、学校教育はだめ人間を作らざるを得ないという背景がある。

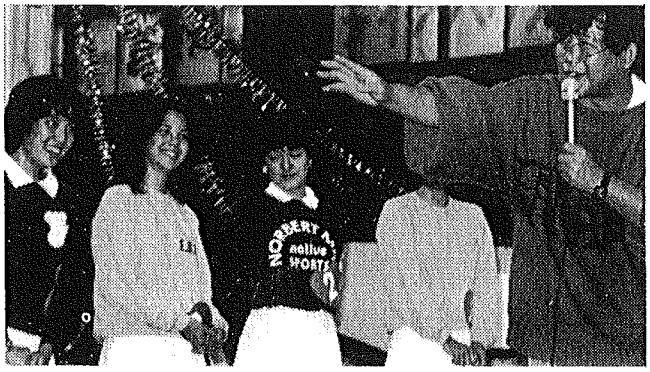
では社会はどんな能力を必要としているか。物事を論理的に考え、知織体系の回路で生きていく人間（垂直思考型）と、物事を直感的に把え、体験則の原理で生きていく人間（水平思考型）の二つのタイプのうちで学校は前者をよしとし、社会は後者を必要としている。また最近のような低経済成長下ではアイディアが重視される時代となる。アイディアは知識がありすぎるとなかなか浮んでこないものだ。今後の日本を背負っていくのは、未知の分野で新しい発見をし体当りで頑張っていく頭脳なのであって、これは体験則型人間の持っている能力だ。優等生ではなかったが社会へ出てから大成した人はこのタイプに多い。何でもできる人間よりむしろ一つか二つはできるがあとはだめだという人や、学校の勉強はだめだが自分には他の能力があると思いこんでいる人間は将来よく伸びる。能力があるのに伸びないのはコンプレックスのせいで、これは本人の気持の持ち方が原因だ。学校は、勉強ができるかどうかで能力のあるなしを決めつけてしまうところがある。要は子供自身が、自分にはまだ他の能力があるのだという気持を持つように、親が言い続けてやらねばならない程、現代の学校の教育制度は子供達を追いつめているということだ。

社会はいろんな能力を持った人間を待望している。人間が自分の能力を伸ばすかどうかはすべて本人にかかっている。親が能力観をもう一度開き直って考えてみるという角度で子供と接していくことが、これからの時代に生きていく子供の一番のエネルギーになるだろう。私自身の体験では大器晩成という言葉に大へん救われたので、親にとって、子供が自己の可能性にチャレンジしていけるような、子供との関わりを持つことが、子育ての一番のポイントではないかと思う。（文責・広報室）

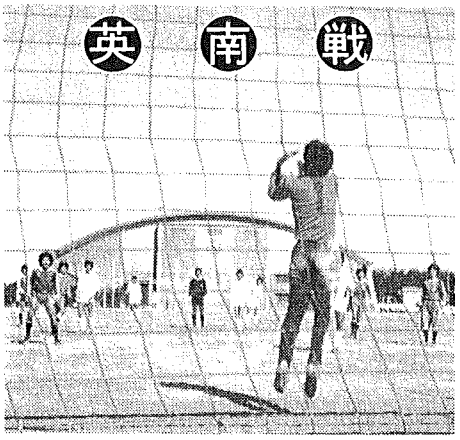
第十九回英知祭盛大に開催

"Paradise"――自らの手で殻を破り、自らの手で真の青春をつかもう――を統一テーマに、第十九回英知祭は十一月一日（月）から三日間開催された。曇天の初日、恒例の田吾作大行進の一行が午前九時にチャペル前の広場に集合、吹奏楽部を先頭にして出発した。コースは阪急西宮北口の構内一円と塚口のサンタウン一帯を一巡。このあと園田駅前で応援委員会が太鼓の音も勇ましく応援歌を披露し、行進の一行は小雨もようの中を正午ごろ帰還した。午後からは野外ステージでアマチュアバンド・コンテストがあり、続いて空手・剣道部による模範演技が披露されたが、重ねられた瓦やブロックが一瞬の気合と同時にみごとに砕け飛ぶ迫力に、満員の観客から期せずして感嘆の声と拍手が起った。三時半からのビッグ・イベントは、H三〇一教室でタレント笑福亭鶴瓶を迎えて「鶴瓶と話そう六十分」が催され、TVの人気者の出現とあって会場は満席で、その聴衆を飽きさせない巧みな話術に終始笑いの一時間だった。鶴瓶氏はこのあと野外ステージで行われた「ミス英知コンテスト」でもステージに現れ、ハンドマイクを片手に得意のジョークを連発しながら学生たちと愉快なひとゝきを過した。

二日目からは好天に恵まれて、教室棟でも文化系クラブの一年間の研究成果の掲示や装飾をこらした模擬店がたち並んだ。学生会館では十時半から西語研究会によるセルバンテスの幕間劇「サラマンカの洞穴」がスペイン語で上演された。紅葉の始まった木立の中では、積み上げられた四十個余りのダンボール箱の中を自転車で通過、何秒でゴール・イン



第十六回英南戦開催



恒例の英南戦は今年で十六回目、十一月二十日（土）、二十一日（日）の両日名古屋の南山大学で行われ、本学から教職員を含む百二十余名がバス三台に分乗して参加した。英南戦は例年冷たい北風に見舞われ、しばしば暖をとりながらの観戦が常だが、今年は両日とも初冬には珍しい温い陽気に恵まれたため選手の体調も良好で、順調な試合運びが展開された。軟式、硬式テニス（共に男女）卓球（男女）、サッカー、洋弓は公式戦で、バスケットボールのみオープン戦が行われた。成績は八種目のうち軟式テニス（男子）だけが本学の勝利であったがどの試合もあと一歩という善戦で、近年本学学生の実力向上と共に英南戦への意気込みも相当なものとなってきた。全試合の終了後、クラブ同士、教職員同士による交歓会が持たれ、終始和気あいあいのうちに両大学の親睦を深めた。

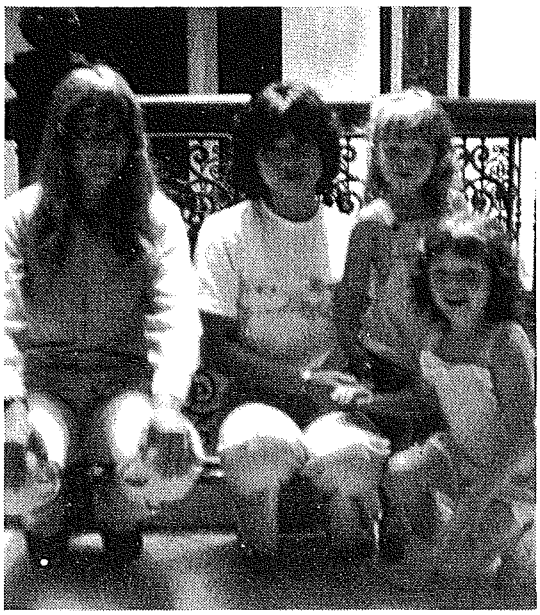
本学と南山大学は規模も実力も差はあるが、上智大学を含めて日本で三つしかない男女共学のカトリック大学同士として、体育のみならず多方面で教職員および学生レベルでの特別な友好関係を維持し、大学発展のための相互協力がなされている。

グループの友情出演などもあって盛況だった。

晩秋の夕暮、学生会館ホールで催されたダンスパーティーを最後に、父兄や卒業生の多数の参加を得、好天に恵まれて一層盛りあがった第十九回英知祭は、三日間の盛大な祭典の幕を閉じた。

デュビューク市で過ごした三週間

仏語仏文学科　三回生
岡田全代



ホスト・ファミリーの子供たちと

この夏私は米国のデュビューク市に三週間滞在した。午前中は本学の姉妹校ローラス大学の夏期講習を受け、午後はホームステイの家族の人たちと過した。

授業の方は朝八時から十一時まで、毎週水・金曜日はレポートと試験があり、かなりハードな毎日だった。しかし授業を終えて家に帰ると、毎日が少しづつ違って楽しかった。奥様と一緒に昼食を準備し、リスや兎の遊ぶ広い庭の一隅のパラソルの下に運んでテーブルをかざる。そのあとは子供達と遊んだり、図書館へ出かけたりする。本探しや、勉強のためではなく、夏休みの子供達がする人形劇などを見るためだ。図書館へ行かない時はダウンタウンへ行ったり、買い物について行ったりしていた。夕方になると教会へ行ったり、御主人とジョギングをしたりした。朝食は簡単だったが、夕食は大変長い時間をかけゆっくりとしたものだった。夕食は必ずコーヒーとクッキーで終わった。八時過ぎてもまだ明るいので、大体庭で食事をとり、一日の出来事や日本とアメリカの違いなどを話し合った。子供達は九時になると本を読んでもらい、ベッドに入る。土、日は学校もなく、朝九時位に御主人の作るクレープやパンケーキを食べ、そのあと教会へ行って、午前中は終わる。

デュビューク市イーグル・パークから見るミシシッピー河は雄大だった。私はこのイーグル・パークに最初の日に行き、最後の日にもこのパークでピクニックをして滞在を終えたのだった。

この街は皆んなとても親切だった。ホストファミリーの友達がディナーやランチに招いてくれたり、乗馬に連れて行ってくれたりした。ハイウエイを少し行くと一面コーン畑で緑一色だ。普通の馬場を走るのではなく、全くの自然の中を走るのが最高だった。誰もがやさしく話しかけてくれた。私が上手に話せない事を知っていても、私の話しを聞こうとして、いつもやさしく耳を傾けてくれた。私はいつも皆に助けられていた。そして彼らはいろいろ私にアドバイスをしてくれた。その親切は心の底から自然的に出てくるもので、決して押しつけがましいところはなく、一方的に与えている感じが少しもしなかった。わが子に対するような親しみがあり、私自身も変に気を使う必要がなかった。

子供達も明るく、暇さえあれば一緒にはしゃぎまわっていた。私に何か分らない言葉があると、五才の子供が両手を広げたり、絵を書いたりして教えてくれるのだ。

そんな生活を通して私は、自分も進んで皆んなの中に入り、話し、何かをしなければいけないと強く思っていた。間違いを恐れず、勇気を持たなければいけない。そうしなければすべてが素通りになってしまうからだ。

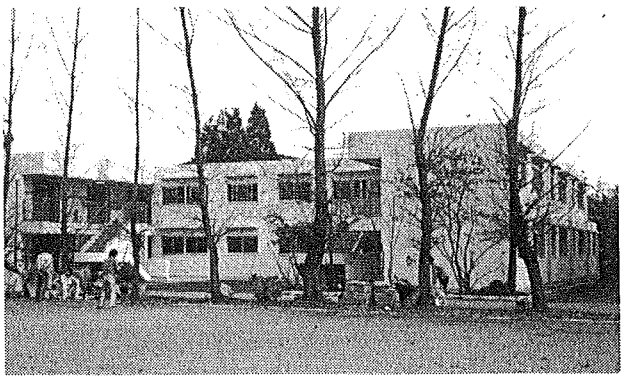
最後にこのような良い経験を得た事を喜び、陰で支えて下さった両親や諸先生方、そしてアメリカでお世話になったすべての方々に心から感謝し、この経験を今後いろいろな形で生かしていきたいと思っている。

学生クラブハウスが新築完成

紅葉の美しいキャンパスの一角に十一月末、新しい学生クラブハウスが誕生した。従来クラブハウスは三つあったが構内に分散し、しかもいずれも木造で、中でも文化系の二つのクラブハウスは開学以来のもので老朽化がひどく、不便で不健全なものとなっており、防火上も問題となっていた。クラブハウスは防火上も安全で、何よりも堅牢さが大切であるのでこの際鉄筋コンクリートでしかも全てのクラブ室を一つの建物にまとめ、課外活動の最良の明るい、健康的なそして便利な環境を作ることにした。いうまでもなく課外活動は大学の重要な使命である人間教育人格形成上、勉学と並んで重要な意味をもつものであり、人間形成を建学の精神としている本学にとり、今回のクラブハウスの建築は少なからぬ意義を持つものである。部屋数も十分ありかなりの人員を収容できるので、できるだけ多くの学生が課外活動団体に加入して、今の若者に欠けている覇気、やる気、積極性、協調心、頑張り、友情を育くみ身につけるよう、大学としては望んでいる。

クラブハウスはとかく汚れ勝ちであるが、新築の機会に大学、学生間でよく話し合い規則をつくって協力して、その適正な清潔な使用を心掛けていきたい。

総工費約一億円（内三千万円は後援会の寄附）、のべ面積九五四㎡（二八九坪）で部屋数は全部で四十室ある。一・二階ともH型構造になっており、一階は中央に四つの部屋とトイレとシャワー室、左右に十一帖ほどの部屋が八室ずつ計二十室ある。広大な温水シャワー室は男子が十ヵ所、女子は八ヵ所で同時に使用できる。廊下の壁面は淡いベージュとアイボリーのツートンカラーで上下を色分けされ、床はグリーンでカラークリート仕上げとなっている。どの部屋にもつり戸棚とつくりつけの椅子が設置されている。一階は運動系クラブが使用する。二階は中央に八室、左右に六室ずつの合計二十室あり、文化系クラブが使用する。アイボリー色の外観は隣接の同系色ツートンカラーの学生会館とよく調和して、課外活動の区域は一段と美しくなった。クラブハウスの祝別式は十二月十一日（土）の午前十時、本学理事長はじめ建設業者の藤木工務店、後援会関係者および教職員学生の参列のもとにとり行われる予定である。



盛況だった第二十一回「夏期神学公開講座」

本学では修道女、一般信徒およびカトリックに関心をもつ社会人を対象に毎年夏期神学公開講座を開催している。今年で二十一回目を数える夏期神学講座は七月二十日から二十四日まで「日本的霊性と福音宣教の問題」の共通テーマのもとに開催された。今年は時期を一週間遅らせたこと、一般人にも興味あるテーマだったこと、また著名人を講師に迎えたこともあって予想をはるかに上まわる、のべ七〇二人が受講した。

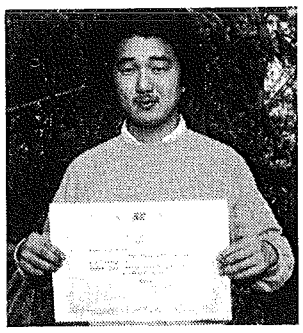
本学ではこの夏期講座のほかに年間の神学公開講座も毎年開催している。この講座は全コースを聴講し一定の単位数を取得した者にはカテキスタの免状が与えられる。

今年の夏期神学講座の講師、テーマおよび日程は次の通りであった。

七月二十日（火）ペトロ・ネメシエギ師（上智大学・イエズス会）「二十世紀の人類精神史における日本の役割（アジアの宗教思想・近代文明とキリスト教の出合い）」七月二十一日（水）ヤン・スインゲドー師（南山大学・淳心会）「宗教社会学からみた日本的霊性」並びに「〝日本的〟福音宣教の可能性と問題点」七月二十二日（木）池長潤師（イエズス会・長東修練院長）「許しの神との出合いと日本の宣教」七月二十三日（金）森一弘師（東京教区・関口教会）「祈りを通しての神との出合い」七月二十四日（土）岸英司師（英知大学）「日本的霊性とキリスト教」。

最優秀男優賞を獲得（E・S・S）

―第二十一回イングリッシュ・ドラマ・コンテスト―



賞状を手に……野本君

十一月二十八日（日）宝塚市民会館大ホールで第二十一回イングリッシュ・ドラマ・コンテストが開催された。本学のE・S・S・（英語研究会）はヘミングウェイ原作「誰がために鐘は鳴る」を上演し、英語英文学科二年の野本昌樹君が最優秀男優賞を獲得した。この催しは関西英語連盟の主催で、朝日イブニング・ニュース社、大阪アメリカンセンター、日本英語検定協会の後援によるもので、今年は本学の他に帝塚山学院、関西外国語、大阪商大、大阪女学院短大、関西大学が参加、得意の英語劇を披露した。本学は三年ほど前に初参加してから今年で二度目。最優秀賞、ベスト・イングリッシュ賞、舞台効果賞はいずれも団体賞で他学のものとなったが、個人賞としては最優秀男優賞、同女優賞があり、本学は二度目の参加でみごとに個人賞を得た。昨年の本学と米国ローラス大学との姉妹校の正式提携以来、国際交流も徐々に活発化している折、このような学生の学外での語学力の活動は、E・S・S・部員のみならず本学にとって大へん喜ばしいことである。

昭和五十八年度 入学試験日程

推薦入学

出願期間　十一月十一日～二五日
試験日　十二月一日～三日
試験科目　現代国語、英語、面接
合格発表　十二月十日書面通知のみ

一般入試

出願期間　一月二十一日～二月五日
試験日　二月十四日
試験科目　国語（現代国語、古典Ⅰ乙（漢文を含まない））
外国語（英語B）、論文（一、二〇〇字以内）
合格発表　二月二十三日　書面通知および学内発表

要項請求は兵庫県尼崎市若王寺二―十八―一　英知大学教務課入試係迄。（〒共八五〇円）

研究室だより

玉谷直実教授（教養課程）
「心理療法における成熟と霊性」の研究により、日本カトリック大学連盟から昭和五十七年度の研究奨励賞を受賞した。

西山俊彦教授（教養課程）
西山教授を代表者とする五人の研究スタッフによって組織されている「生駒の宗教と社会調査研究会は、「キリスト教土着化への基礎考察―生駒山系にみる日本人の心性・民族宗教の褶合様式の総合的研究―」と題する調査研究に対して日本カトリック大学連盟からカトリック学術奨励金（百万円）を受領した。

またこの他に日本経済新聞社から「経済文化と民俗宗教」との課題に対して、日本経済研究奨励財団奨励金（七〇万円）も受領した。

研究発表

西山俊彦教授（教養課程）
「GD規定要因に関する試論的研究」
日本グループ・ダイナミックス学会第30回大会　昭和57年7月10・11日　於関西大学
集団・リーダーシップ部会（座長兼任）

「集団分析と主観的組織構造―DSIGの事例を通して―」
日本社会学会第55回大会　昭和57年10月9・10日　於神戸大学
社会心理・社会意識Ⅱ部会

「集団分析とパーソナリティ構造―DSIGの一事例を通して―」
日本社会心理学会第23回大会　昭和57年11月13・14日　於東北大学

＊　＊　＊

翻訳・出版

井上博嗣教授（英語英文学科）は甲南大学の毛利至教授らと「疎外とアメリカ小説」を出版した。十月一日（二六六頁）〝ブック・ローン出版〟一、七〇〇円

前田総助教授（仏語仏文学科）はフランソワ・モーリヤック著「テレーズ・デスケールー」を翻訳出版した。二月二十七日（二六六頁）〝青山社〟出版。

慶弔

結婚

おめでとうございます。

後藤文昭講師（西語西文学科）
松原千代野（旧姓佐治・学生課）

訃報

つつしんでおくやみ申しあげ、故人のご冥福をお祈りいたします。

カシミロ・エルナンデス講師（西語西文学科）
尊父逝去　昭和五十七年四月二十八日

朝田恵子（図書館）
母堂逝去　昭和五十七年十月二十八日

＊　＊　＊

岡田利兵衛先生逝去

今年六月五日肺炎のため市立伊丹病院で逝去された。享年八十九。先生は本学で非常勤講師として昭和四十二年度から五年間、国語国文学の教鞭をとられた。聖心女子大学名誉教授で伊丹市長もつとめられ、俳諧文学者としては著書「芭蕉の筆蹟」で文部大臣賞に輝き、また兵庫県文化賞を受賞、勲四等瑞宝章の叙勲およびローマ教皇から聖グレゴリオ騎士章を受章された。先生の芭蕉真蹟はじめ俳諧を中心とする資料は世界的に著名で、その学術的貢献は高く評価されている。

つつしんで先生のご冥福をお祈りいたします。